

葉山嘉樹論の前提

— 豊津受容の様相をめぐって —

* 浅 田 隆

葉山嘉樹は明治二十七年三月十二日、福岡県豊津村（現在豊津町）大字豊津六百九拾五番地に生まれ、大正二年三月二十二日福岡県立豊津中学校（現在福岡県立豊津高等学校）を卒業、三月二十九日早稲田大学高等予科文科に入学した。教え二十歳のことである（前西和彦氏「葉山嘉樹年譜」『葉山嘉樹』昭48・6 桜楓社）。

さて、この二十歳までの豊津における生活の期間をここでは一応豊津時代と呼ぶことにするが、彼の豊津についての印象や豊津時代についての記憶（豊津受容）を分析すると一貫して豊津を厭悪する傾向が見受けられる。そして、このような嘉樹における豊津受容の様相と、豊津中学の先輩で嘉樹と同じ豊津土族でもあった堺利彦の豊津受容の様相とを比較するとき、嘉樹の豊津受容にはかなりの異常性が感じられるのである。紙幅に制限があり詳述する余裕はないが、豊津は豊前小笠原藩終熄の地で、幕末から維新にかけての小笠原藩の流転の歴史によって醸成された豊津なりの精神風土があったようであり、嘉樹はこの豊津の精神風土に対して何らかの精神的軋轢を抱いていたように思われるのである。

小稿では堺利彦の豊津受容の様相との比較を媒介に、嘉樹の豊津受容の問題点を考察してみたい。筆者はこのことが嘉樹の自我形成過程を考える際のひとつの前提となるように思っている。

眼を閉じて身を仮りに高きに置けば、懐かしき我故郷の面影、髣髴として浮び来。浮ぶよと思へば、心は早や其の中に分け入りて、山の嶺、川の上、我が家、人の邸、其処此処を駆け廻りて、数知れぬ様々の幻ぞ湧き出る。其の様々の幻の画の如く、詩の如く、鮮かに闇に彩られて光を放つに、身も心も今は全く空になりて、とろとろと恋しさにぞ酔ふめる。

是の如き十年遊子の情、知らぬ人には興とてもあるまじけれど、仮然もあらばあれ、我は我が幻を写して試ん。（其一 十年遊子の情）
やうやう大橋の町に入れば、馬車は警察署の前に止る。（中略）
竹並（たけなみ）の村を過ぎて、釜破（かまわれ）の池の辺を伝ひて、坂一つ登れば是ぞ恋しき懐しき我が故郷の豊津なる。

（其二 故郷への途上）

右は堺利彦の「望郷台」（『読売新聞』明29・3・30）4・6 『堺利彦全集』第一巻 昭46・1 法律文化社 収載）の冒頭である。特に「其二、故郷への途上」の省略した前半の部分には「二三百里の山を越え川を渡りて、二条の鉄路の蜿蜒たるが、地図の如くに我が心眼に映じ来。」
「門司小倉は既に我が郷国也。小倉より大橋、今は鉄路の敷かれたれど、我が眼に映るは猶元の乗合馬車なり。」といったふうな、次第に近づきつつある故郷への馳するが如き思いが記されているのである。

堺利彦は既述のように嘉樹と同じ豊津中学の出身（明19・2卒）でもあるが、右の引用文には、堺の豊津に対する思慕の情が沸々とたぎっており、彼にとつての豊津には母なる故郷の感がある⁹。

堺は明治十九年二月二十四日、十六歳で豊津中学を首席で卒業し、東京大学をめざして上京したが第一高等中学校在学中、放蕩の末、明治二十二年月謝不納により除籍された。以後小学校教員や『大阪毎日新聞』『新浪華』その他を転々とせざるを得なかつた彼には、それは失意の状況と言えよう（『堺利彦略年譜』『堺利彦全集』六巻 昭45・11 法律文化社）。このような失意の状況にあつた堺にとつて、青雲の志に燃え、さらに無限の可能性を夢見得た中学卒業までの豊津での生活は、精神の故郷であり得意の時代として胸に暖められていたに違いない。

古賀武夫氏は『豊津開化小史―播磨期の豊津について―』（昭45・9 福岡県立豊津高等学校百周年記念刊行会 以下『開化小史』）の中で、堺の中学時代について以下のように述べておられる。

彼は明治十五年の春、豊津小学校を優等で卒業し、同年六月五日満年令十一歳八ヶ月で豊津中学校に入学した。二年後の十七年三月に四級、十七年九月に三級、十八年三月に二級、十八年九月に一級とトントン拍子に進級し、十五年六月に入学以来三年九ヶ月の十九年三月に首席で卒業した。当時としては実に稀有な経歴といわねばなるまい。

当時の豊津中学についての予備知識がないと、右の引用だけでは堺の壮挙を十分に理解しにくいのが、例えば、当時豊津中学を受験するため「遂志校」とか「育村校」といった私立の予備校的な学校があつたことや、補注③で紹介したような豊津中学の修学状況などから堺の在学期間を考えれば、それがいかに「稀有な経歴」であつたかは想像がつこう。

このような豊津時代をも含めて、後に彼は自己の人生の歩みについ

て次のように述べている。

ああ堺利彦よ。君の半世のいかに平凡にして、そしていかに主我的なることよ。君は士族の子として、少年時代からいわゆる「立身出世」を夢みていた。小学、中学、高等中学と、すこぶる順調に行きかけて失脚した。その後、小学教員となり、新聞記者となり、文士小説家のまねごとをして、世の中を泳ぎまわつた。しかもそれがやはり、少しなりとも自分の生活の程度を高め、社会的の地位を進めようとするモガキにすぎない。いわゆる「立身出世」の信条は依然として少しも変わっていない。それから君は、とかくしているうち、世間並みに妻を持ち子を持ち、はなはだしく貧乏でない生活を送りうる境遇となつた。そして最後に万朝報というやや人目を引くに足りるだけの舞台に登つた。それがすなわち君の「立身出世」であつた。それがすなわち君の半世の「アコガレ」の実現であつた。

（傍書筆者）

これは「堺利彦伝」（『改造』大13・12〜14・9）の結びの部分（『第六期 毛利家編集時代―上巻の総括―』の一節である。時期的には三十三歳頃までの自己を五十四歳の眼から見たものである。右の引用部分の後に、「儒教の『身を立てる』ということが、いわゆる『立身出世』主義になる」とか「儒教には『身を立てる』と同時に『道を行なう』という理想があつた」とか、さらに「『功名富貴、手につばして取るべし』とはだいたいぶん違う」とも言っている。彼にとつての「立身出世」は世間一般の「立身出世」概念における利権追求とは少々異なっていたようではある。しかしそれが上昇指向であつたことに変わりなく、また、自己が指向する価値・世界が漠然とした程度においても自覚されていないという点で、堺における「立身出世」主義も、世間一般のそれとは世俗性の有無という点で区別されるにすぎないものだと見えるに違いない。そして、いかなる内実であつたにせよ、立身

出世の志に燃え続け得た限り、豊津中学は堺にとって立身出世の起点たり得たであろうし、また中学を介して豊津そのものは甘美なあこがれの対象ともなり得たと思われる。

林尚男氏は「望郷台」の特徴について、

故郷の美しい自然に対する回想があるだけでなく、そこで移り変わる人々の運命が、変らない自然との対比の上でえがかれていく点にある。

と述べておられる（「堺利彦における故郷」『日本文学』昭49・9）。確かに「望郷台」の「其九 金の冠」から「其十二 娘」などに至る主題は「移り変わる人々の運命」に対する感慨にあると言えるだろう。そしてこの「移り変わる人々」の姿は上昇する姿においてではなく、下降としての没落の相においてとらえられているのである。こうした特徴は後に触れるような豊津自体の衰退にも起因するであろうが、やはり「故郷の人々の移り変わる運命」への「関心と共感」は、彼自身の出世の階段をふみはずした没落体験によって裏打ちされている（林尚男氏）のであろう。また、故郷からの不本意な絶縁や「自分と母と故郷を一体のものとしてとらえる傾向（林尚男氏）などにも起因すると思われる。

長々と堺利彦における豊津受容について見てきたが、それでは嘉樹は豊津をどのように受容しているのだろうか。

残念ながら堺に比べ、嘉樹には豊津そのものや自己の豊津時代について語った文章が少ない。あれほど多くの身边風景的な作品を残した彼でありながら、最も多感な時期を過ごしたはずの豊津についてあまり書いてはいないのである。このことはこれ自体、嘉樹論の一つの問題点となるように思われる。

さて、彼が豊津について触れた作品としては「死屍を喰ふ男」（『青年』昭2・4）・「誰が殺したか？」（昭5・1 日本評論社）・「文

学的自伝―山中独語―」（『新潮』昭11・11 以下「文学的自伝」）・「釣り三味」（『福岡日々』昭12・6・14、21、28）などの他に「龍ヶ鼻」と「原」――わが郷土を語る――」（昭和六年度版『新潮文芸日記』昭5・11）などがある。

「死屍を喰ふ男」は寄宿舎の同室生が隣接の墓地の新仏の棺をあばきその死肉を食う姿を目撃する、といった学校の寄宿舎などによくある怪談ものを豊津中学に置きかえたにすぎないような作品ではあるが、そこに見られる冒頭の部分は初期の彼らしい簡潔な文体で中学校周辺の風景をうまく伝えている。

中學は山の中にあつた。運動場は代々木の練兵場ほど廣くて、一方は懸社○○神社に續いており、一方は聖徳太子の建立に係ると云はれる國分寺に續いてゐた。そして一方は湖になっていた。

（中略）

その湖の岸の北側には屠殺場があつて、南側には墓地があつた。今日の豊津は嘉樹が言うような山の中というほどではないが、町全体としては、耕作地、居住地よりも松林（所謂山か）が多いようである（古賀武夫氏の御教示によると、昭和四十九年十月末の町人口は八、九七四人・総面積、九五六ヘクタール、そのうち耕地面積七三二ヘクタールである）。

さて右の引用に続いて、嘉樹の豊津受容の一端を感じさせる次のような部分がある。

學問は静にしなければいけない、この標本でもあるやうに、學校は静寂な境に立つてゐた。

おまけに、明治が大正に變らうとする時になると、その中學のある村が、柱を抜いた風呂桶の水のやうに人口が減り初めた。残つてゐる者は舊藩の士族で、いくらかの恩給を貰つてゐる廢吏ばかりになつた。

何故かなら、その村は、殿様が追ひ詰められた時に、逃げ込んで無理に拵へた山中の一村であつたから、何にも産業と云うものが無かつた。

で、中學の存在によって引き止めようとしたが、困つた事には中學がその地方十里以内の地域に一度に七つも創立された。

このような部分からうかがわれる嘉樹にとつての豊津は、堺にとつてのそれが甘美な精神の帰属地としての故郷であつたことに比べ、ずいぶん異つた、一種の突き放した客間気が感じられるだろう。

堺が少年期をすごした豊津との間には約二十年の隔りがあり、その間に豊津そのものが変貌したことは多分に考えられよう。しかしそれにして、「堺利彦伝」に「豊津士族の大坂移住」(二の三)という項があり、また「豊津時代」(一、二)にも士族の没落や豊津流出について回想されており、「望郷台」の「其十一 廢邸」でも、幼少時の生活周辺にあつた「廢邸」のことが記されているように、堺の時代から既に、嘉樹が言う「柵を抜いた風呂桶」のような人口流出現象は始まつていたのである。さらに「望郷台」の「其四 豊津の歴史」では嘉樹が「殿様が追ひ詰められ」「無理に拵へた山中の一村」と言つた豊津集落生成の事情について述べておりながら、嘉樹のような乾燥した文体は見られず、「其五 豊津の人家」「其七 城下の威厳」などでは「堺利彦伝」と読み比べれば明らかのように、故郷の往時としての衰微以前の豊津のみならず、衰微しつつある豊津をも抒情的に美化してさえているのである。このように、堺にとつて豊津は濁り気の感じられない郷愁の対象となり得、「恍惚たるエクスタシーの感」「堺利彦伝」とも言っているように遠い昔への純な思いのみで満たされており、豊津に対する嘉樹のような厭悪の念は全くない。滅びゆく人家(廢邸)に対しても、故郷の廢家といったふうな一種の懐しみを感じさせるのである。また故郷の人々についての回想に際しても、先に述

べたような没落の姿を語りながら、そこには淡いほのかなロマンが感じられる。先に引いた嘉樹の文章から感じられる豊津受容をこのような堺と比較した時、読者は嘉樹の文章の中にある豊津に対する嘲笑的気分が驚くのではないだろうか。

「龍ヶ鼻」と「原」は短文ではあるが豊津を直截に紹介した好文章であり、全文を紹介されたことが無いので、次に引くことにする。

私の育つた村、豊津村は、昔、難行原と呼ばれてゐたらしい。私の村の附近には無暗に「原」のつく地名が多い。「原」をハラとは讀まないで、ハルと呼ぶ。「狐原」はキツネバルであり、「新田原」は、シンデンバルである。

このハルの原は、開拓されて桑畑となつたり、その後へ果樹園が作られたり、またその後へ女學校が建つたりするが、又、いつの間にかその多くはハルの原に歸るやうである。

私は幼少の時代を甲塚と呼ぶ字で育つた。そこには畑の中に凸字形の古墳が澤山あつた。秋になると榎の木が黄葉して、甲塚を飾る。

甲塚の北の方、今川の流域の平原の傾斜に墓地があつた。

この墓地には私の祖先や子供たちも眠つてゐるが、そこにはいい芝生がある。

幼少時代の私は、その芝生から、今川の流れや、それに沿うて田川地方の炭坑地に走つてゐる鐵道、直ぐ足下の、空と同じ色を映した池、それから五六里の平野を見はるかして、不思議な幻想的な形に横はる龍ヶ鼻の山容などを、全半日もぼんやりを見とれてゐる事が多かつた。

この「龍ヶ鼻」と云ふ山は、いい山である。それは未來永劫、この地球の海面には現はれ得ないだらう巨船の船首である。

だが、その外の山はなつてゐない。思索も幻想も叩つ、壊す、赤上山

の禿だらけで、その上に縮れつゝの小松が、臆病に生えてゐる。

だが、いづれにせよ、私はそこで、一番私に親しかったものは、それ等の自然であつた。人間の噂は、あまり私に興味を起させなかつた。

一見するとこの文章は、嘉樹の、母なる故郷の山河に対するノスタルジーを感じさせる。が、内容の構造を検討すると、逆に、自己の豊津時代に対する執拗な拒否の姿勢を見ざるを得なくなる。端的に言うると先にも述べた界の場合、故郷の人々と自己及び自己の豊津時代の思い出の世界にのめり込む姿勢が感じられたが、それとは全く逆に、嘉樹の場合、大正二年（二十歳）までの自己を培った時間やその中に展開されたであろう具体的な人間関係については全く触れることを拒否し、自己内部の豊津時代の記憶の世界にわけ入ることを出来るだけ拒否しているのである。例えば、「私の育つた村、豊津村は」と書き起し、あたかも育つた時間帯の村に言及するような書き方をしながら、「昔」の村の方向に体をかわし、「ハル」という独特の読み方の説明から人と自然のかかわりに触れ、育つた時間帯の村の様相に言及するかの態度を再び見せながら、「いつの間にかその多くはハルの原に歸るやうである」というかたちで悠久の時間の流れの一点景にしてしまひ、遠くから眺めるような臨場感の無いものにしてしまふのである。そして甲塚の古墳から墓地に話題を転じている。この墓地の叙述に至って初めて豊津時代の嘉樹が豊津村の住人として登場するのである。しかし注意しなければならないのは、墓地は現実の葛藤の渦中にある村の生活とは別な、既にそれらの葛藤に終止符を打った死者達が眠る地であり、ここでも育つた時間帯の村の現実から離れているのである。これは二重の意味で注意を要するように思われる。一つはこの文章を背く段階での嘉樹が甲塚の墓地とのかかわりに初めて初めて自己を登場させ得たということ、もう一つは豊津時代の嘉樹が次に述

べるような形で墓地という特殊な場に親しみを感じていたらしいということである。

彼は「そこにはいい芝生がある」として墓地の芝生に好意的態度を示しているが、その芝生は彼を村外の世界に誘う場所であつた。つまり、墓地の芝生に置かれた嘉樹の視線は村の内部に注がれず、遠くから村をとりまいている景色の方向に注がれているのである。しかし、この村を取りまく景色への視線を、単なる自然としての景色に注がれた視線と考えてよいだろうか。先に述べたように墓地が現実の葛藤に終止符を打つた人々の眠る場所であつたことと考えあわせると、それは嘉樹の異郷への憧れとして、さらに、故郷からの脱出指向として考え得るのではないだろうか。

豊津中学校の元校長中村龜藏氏は嘉樹と同世代の豊前人であるが、彼は幼少時を回想した文章の中で、小笠原神社の「社殿の後ろの山に登り、頂上の巨岩の上から眺めると近く国分寺の三重の塔を望み、眼下にだぶだぶと春水をたたえた長陽の池や泉池を見おろし、西方を眺むれば郡境の山脈や、今川流域の村々、今川の注ぎ入る青い周防灘を一望におさめることができ」（『心のふるさと』昭45・8 豊津高等学校）と述べており、また堺は「望郷台」に「磐根社の磐の上より望めば豊津一面の原々谷々、一々指し示すべし」とか「磐根社より望まんか。東の一方海に開けて、他の三方は大小の山々。」と記している。筆者の経験でも、この磐根社のある八景山は同様に眺望のきく場所であり、豊津を取りまく景色を眺めるには甲塚共同墓地の他にも場所はある事だったのである。にもかかわらず、「その芝生から」「見とれてゐる事が多かった」と言っているように、嘉樹は特にこの墓地の芝生を選んでゐるようである。

「『龍ヶ鼻』と『原』」の最後の部分で、嘉樹はやつと豊津に視線を向けている。しかし、豊津に視線が向けられた時、彼の記憶の網膜

に映ずるものは「赤上」や「松林」なのだが、彼はそれらのものを「縮れつ毛の小松が臆病に生えてある」とか「思索も幻想も叩つ壊す赤上山の禿だらけ」と吐き出すように記すのである。「松林」や「赤上」は豊津の自然風土の象徴であり堺も中村氏もこのことに触れている。しかし堺や中村氏にとっては、赤い土や緑の松といった自然は、美的な色彩のコントラストとして受容されているのである。これに比べて嘉樹の場合、豊津は、「赤上」がむき出しになった「禿だらけ」の山に「縮れつ毛」のようなかっこうで「臆病」にしがみついて「生えてゐる」「小松」というイメージが想起されているのである。このような表現の背後には、豊津時代の嘉樹が見た豊津人達の生き方に対する彼の印象が投影しているように思えてならない。

集落としての豊津は小笠原藩流転の歴史的産物であるが、幕末・維新・維新後の政策転換によって豊津は経済的な苦境に陥っていた。その結果として、先の「栓を抜いた風呂桶」のような人口流出があるわけだが、こうした中で、土族達の一部は藩領の中心地としての豊津にしがみついて赤上を耕したり秩祿公債に頼ったりしつつ、つつましい生活を守っていたのである。嘉樹にとって赤上に生える松は、廃藩後の土族達の生活現実（山藩解体後も、なお赤上の、産業も何もない豊津に残留している土族達の）の表象として映っていたのではないだろうか。「『龍ヶ鼻』と『原』」の最後の段落は、このような豊津（自己を培った）の時間や空間からの脱出指向の原因の説明ともなっているとと言えるだろう。

文章の内容の構造から、嘉樹の豊津離れの指向性を見て来たが、傍点を付した第一の部分は複雑な問題を投げかけているように思われる。

この墓地には私の祖先や子供たちも眠ってゐる。
という部分である。

葉山家の墓はこの甲塚の共同墓地のほぼ中央にある。墓碑や墓域については補注⑤に記したとおりであるが、先の「子供たちも眠っている」という記述から判断すると、この甲塚の共同墓地には二人以上の幼い霊が眠っているということになる。

嘉樹がもうけた子供のうち、右の記述に該当するのは、「『龍ヶ鼻』と『原』」を発表した昭和五年十一月までに夭逝した山井ヒサエとの間にもうけたタミ（大8・4・5生、同月10没）と愛子（大9・3・12生、同年10・3没）、そして塚越齊和子との間にもうけた嘉和大10・5・1生、大14・5・24没）と民男（大11・11・11生、大14・10・15没）の四児である。が、嘉樹は愛子の出生後間もない同年十月に山井ヒサエと別れ、塚越齊和子と愛子をとめない名古屋に出てしまったのである（蒲西和彦氏「葉山嘉樹年譜」）。

嘉樹が失った二男二女のうち、山井ヒサエとの間に生まれた長女タミは彼の戸畑時代に夭逝した。したがって、タミだけは豊津の墓地に埋葬された可能性が多分にある。しかしそれ以外の三児、愛子・嘉和・民男については少々事情が違ってくる。と言うのは愛子は名古屋で嘉和・民男は岐阜でそれぞれ死去したのであり、豊津からはかなりの遠隔地であった。さらに彼は既に見て来たような豊津受容の特殊性ゆえにか、離郷後そう度々豊津に帰ってはいない。にもかかわらず、この墓地に「子供たち」が眠っているとすれば、少なくとも死者についてだけは豊津を父祖の地と考え、帰るべき所と考えていたことになる。また仮りに彼が、ここに子供達を葬ったのではなく、「葉山家諸霊位」という墓碑銘ゆえにこのように言っているとすれば補注⑥⑦との関係で、一層嘉樹の豊津受容は複雑なものとなってくる。

先の「『龍ヶ鼻』と『原』」では墓地の芝生が豊津外の地への脱出指向の起点となっており、そこには遙かなるもの・異郷を遠望する視座がすえられていたが、これは靈魂の通過地（あるいは帰住地）とし

の墓地という意識を表象しているのかも知れない。こうなってくる
と、日本の伝統的な「家」に規制された精神構造と近代的な個の意識
に立った自我構造との重層的な様相を彼が内包していたことになっ
てくるのである。しかし、彼の作品を見る限り、このような精神構造を
自覚的に対象化しようとする傾向は見られず、彼自身、自己内部のこ
うした様相については無自覚であったとも思われる。

「『龍ヶ鼻』と『原』」の問題点を中心に考察を進めて来たが、こ
れ以外に「文学的自伝」や「誰が殺したか?」にも断片的には豊津に
ついて語っているのである。特に長編「誰が殺したか?」では、作品
全体のポリウムからするとほんの一部にすぎないが、かなりの長
さにわたって豊津時代と豊津にまつわる現実に触れている。しかし作
品化された時、「私には故郷は憎々しい丈けである」(二人の生ける
子供へ)とか「村中の爪はじぎになつてやうな格好の私」(祖父の死)
という部分に象徴されるような、やはり故郷に対する否定的態度によ
って貫かれているのである。

父荒太郎は小笠原藩士であり、慶応二年の第二次征長の役に際して
は赤心隊々士として切り込み要員に加わっているが、堺利彦の父得司
も赤心隊に加わった藩士である。身分的には荒太郎が四百石(『小倉
市誌』上編 大10・7 小倉市役所)、得司が十五石四人扶持(『堺利彦伝』
で荒太郎の方がはるかに上位にある。秩祿公債も十五石四人扶持の得
司が七百円(七歩利付きで年利足五十円足らず)であった(『堺利彦伝』)
ことからすると、荒太郎の場合は多額の公債を公布されていたはずで
あり、経済的にはかなり恵まれていたと思われる。さらに得司が隠居同
然の生活であった(『堺利彦伝』)のに比べ、荒太郎は郡長という要職
にあり、月々二十五円の給料を支給されてもいる(中村龍蔵氏「心のふる
さと」より推定)。にもかかわらず二人の間には豊津をめぐって全く逆
な姿勢が見られるのである。

以上見て来たように堺利彦における豊津受容の様相と比べる時、嘉
樹の豊津受容の様相には異常性が感じられるのである。このような嘉
樹の豊津受容の異常性をテコに嘉樹の豊津時代についての考察を試み
るならば、あるいは豊津時代における自我形成過程を明らかに出来る
のではないかと思っている。小稿では紙幅に制限があり自我形成過程
の探索や、その前提としての嘉樹の文章に描出された豊津像と現実の
豊津との関連については全く触れることができなかったが、この点に
ついては別稿を準備している。

小稿を草するにあたり、古賀武夫氏、中村龍蔵氏、渡辺勇氏、の
御教示を得た。ここに記し深謝申し上げる。

(一九七五・六・一)

補注

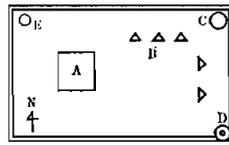
1. 嘉樹の出生地について浦西和彦氏は「葉山嘉年譜」の中で、「嘉樹の
出生地については疑問が残る」として「大字豊津六百九拾五番地」に
生まれたと断定することを避けているが、これは嘉樹の豊津時代が何
時に始まるのかといった起点の問題にもかかわってくる。しかし、嘉
樹の父荒太郎が「福岡県上毛郡宇島町大字宇島七拾八番地」より前記
の住所に転籍したのは嘉樹の六歳の時であり、小稿では豊津時代の起
点にこのような疑問があることを確認するにとどめたい。

2. 「望郷台」に見られる堺の郷愁は、決して望郷台という題名に規制さ
れた結果ではない。例えば「堺利彦伝」や「子の半生」(『半生の墓』
明38・7 平民書房 収載)その他にも故郷に対する思いは連綿と
記されており、堺は終生変ることなく豊津(豊前)への帰属意識を持
ち続けている。

3. 明治十七年から二十年までの豊津中学全入学生数四四四名中、遂志校
出身者二六六名、さらにその後身と目される育材校については、明治
二十年から二十七年までの全入学生八三三名育材校出身者三七一名

ということ、豊津中学は当時かなり狭き門であった。したがって育材校の在籍者も多く、「『県教育史』」によれば一三六六人、『京都郡誌』によると「一五〇人」という盛況だったらしい。このような事情のため、豊津中学の新入生の年令も、明治八年から二十年までの学籍簿による平均では十四・七歳とのこと。昇は十一歳と八か月で入学している。卒業進級についても、当時の豊津中学は在学期間を四年とし、八級に分け、それぞれの級の修業期間を六か月としていたが、明治十六年と二十年の入学者五百余名のうち、卒業者は入学者の約十パーセント、中途退学者は実に九十六パーセントに達する。（『開化小史』）

1. 今では屠殺場はなくなっているが、「潮」は栗島池、「〇〇〇神社」は小笠原神社である。神社境内は開かれ町役場や文化施設などの敷地となっているが、鳥居は昔の位置にあり、ほぼ豊津高等学校に隣接している。



5. 葉山家の墓は、墓域約十平方メートルで長方形の角石材で域内を開いている。図示すると上のようになる。Aは墓碑、Bは自然石とも思われるが、形状としては一辺約四十センチ程度の三角垂形の石、Cは本榊の生木である。Aの墓灯籠の礎石（？）、Eは本榊の生木である。Aの墓碑正面（東面）には浦西氏の「葉山嘉樹年譜」にも見えるように「葉山家諸靈位」とあり、南面に「明治四十二年建之 葉山荒太郎」と彫られている。これは葉山家が仕えていた小笠原藩が幕末・維新期の動乱に巻き込まれ、小倉より香春を経て豊津（元は鍋原）に移住し、ここが小笠原藩の終熄の地となったという歴史的背景とかわっており、豊津に定着した藩士が多かった。このような事情から、荒太郎が豊津の甲塚共同墓地に葉山家の墓を新設し、先祖の霊を合祀したものと思われる。

図示したように墓域内には北側に三個・東側に二個の石が置かれており、この石はどれも合祀以後の死者の埋葬地を標示しているようにある。これら五基の標石が一体誰のものなのか全く見当もつかないが、

6. 明治四十二年以後の、葉山家に属する霊を考えると、この五基の中には嘉樹が失った子供達の幼い霊も含まれているということになる。柳田国男は日本人は霊のあり処を山の上に想定し、山から墓を通して家へというかたちで祖先の霊が家に帰って来るといふ霊視観を持っていることを紹介している（『魂の行くへ』、『定本柳田国男集』 38・6 筑摩書房）。また祖先を祭ることはやがてそれが自分を祖先の中に組み込むことになり、そこに自己の存在の証しを認めようとする発想型があることを紹介している（『先祖の話』、『定本柳田国男集』 十巻 昭37・7）。考えを十分に整理しきれないが、嘉樹が墓の芝生から外に視線を向けていること、また死者の眠る地に心の平安を見出し出していることなどからすると、霊魂の帰住地そのものでないかも知れないにしても、無意識裡に祖先の霊が家を訪れ家を去るその通過点としての墓場に視座をすえていたということになるのではないかと。となると嘉樹は祖先や家（派生的には村）を自我構造内部に持っていたことになるのである。

7. 補注の⑥とも関係するが、このことは、筆者が考察しようとする豊津の精神風土と嘉樹とが深くかわっていたことを立証することにもなる。嘉樹の豊津に対する厭悪の念の質に関係するが、彼は豊津を意識の世界では厭悪しつつ、意識の深層には無条件的な帰属本能を持っていたということになる。豊津が嘉樹の内部世界に何らの意味も持っていないのであれば、豊津の精神風土を考察することなど無意味である。

彼は「この墓地には私の祖先や子供たちも眠ってあるが」と述べている。しかし墓碑銘にもあったように「葉山家諸靈位」とはなっている。が建立は明治四十二年のことである。葉山家は小笠原家の流転に付き従って豊津に来たわけで、豊津は真の意味での父祖の地とは言いがたい。にもかかわらず嘉樹はここに父が新しく建てた墓碑によって「私の祖先」が眠っていると、言い、また彼の言うところが真実であるとすれば、この祖先が眠るところに「子供たちも眠らせたことになる。」

もし精神（自我）構造内部に深く豊津が入り込んでいながら、自覚された世界では豊津を厭悪せざるを得なかったとすれば、彼の自我形成過程に豊津の精神風土の向かが強く作用したと判断せざるを得ない。

A Premise about Yoshiki Hayama

Takashi ASADA

Summary

It's a riddle that formation process of his ego. He hated his native "ToYoZu". Why did he hate? This question is a clue about his formation process of his ego. This study cleared his extraordinariness that he hated his native.